

プロ登山家・竹内洋岳による8000m14座コンプリートをめぐって

竹内洋岳（プロ登山家）

柏澄子（山岳ジャーナリスト）

2012年5月26日現地時間17時30分ごろ、プロ登山家 竹内洋岳は、ネパールにあるダウラギリ I 峰（8167m）に登頂。これにより18年かけて8000m峰14座すべてを登ったことになる。

今回は竹内にインタビューする形式をとり、これまでの登山について、いくつかの局面を中心に振り返る。

登山研修所講師に、そしてヒマラヤへ

1995年、登山研修所講師になる。その後、立正大学を卒業。入学から8年後の98年のことであり、山岳部にも同じく8年間在籍した。卒業と同時にICI石井スポーツに就職。

大学在籍中にも4度のヒマラヤ登山の経験があるが、頂きを踏んだのは95年のマカルー東稜が最初。マカルー東稜は、竹内の登山のなかでも評価されるキャリアのひとつであり、海外では「あのマカルー東稜のチームにいたヒロか」と言われることもしばしばだった。先発隊が日本を発ってから登頂までに、2ヶ月半以上。BC設営も並大抵の苦勞でなかったのならば、登攀もしかり。上部キャンプを7つだし、至極厄介な雪の処理や際どいクライミングが要求された長大な雪稜をたどった。

翌96年にはチョモランマ、K2と続けて登頂。マカルー東稜に続き、エベレストとK2を“ハシゴ”した日本人として、海外のクライマーたちに“ヒロ”の名前が知られることになった。

竹内：

登山研修所で学んだことは、いろいろな意味で勉強になりました。登山研修所で育った者が8000m峰14座を完登したという記録は、意味のあることだと思います。登山は競技種目と違って答えが見えにくいときがありますが、今回のことはわかりやすい記録です。登山研修所のひとつの大きな成果だと考えてよいと思います。

登山研修所は、講師同士でも高度なやり取りがあり、学び合う場所でした。単体の大学山岳部だけだと、毎年同じようなことを繰り返していて、なかなか技術の刷新がおこなれません。しかし登山研修所には、現役でヒマラヤ、ヨーロッパアルプスを登りこんでいる人など色んな講師がいて、それぞれの場所から最新のものを持ち寄っています。

時を同じくして、マカルー東稜がありました。これはまるで“ひとつの会社”を運営するような登山でした。このような大規模な組織登山は、これが最後でしょう。

またマカルー東稜のような探検的要素を含んだ登山というのも、この先可能性が薄いと思います。ロシアから取り寄せた不鮮明な衛星写真1枚を手がかりにして、外国人に開放されていないエリアへ、インターネットもない時代に分け入っていったのですから、それは面白かったです。私は幸いにも先発隊だったので、ベースキャンプに適した場所を探すことから始めました。いまの時代だったら、こんな泥臭いこと、至極面倒なことはしたくないと思うかも

3. 海外登山記録

しれません。しかし、私たちはあそこにいることが、すごく楽しかったんだと思います。一步足を踏み入れたその先に何があるかわからないような感覚がありました。まるでデイヴィッド・リヴィングストンとかエリック・シプトンらが実践していた探検を、私たちもやることができたのではないかと思っています。時代に恵まれていたんですね。

ラルフ・ガリンダら仲間たちと出会う

K2のあと、次の8000m峰までは数年あった。しかし振り返るとその間は、竹内にとって、その先の道の下地を作っていた時期にあたろう。99年はチベットのリャンカンカン（7534.6m）に初登頂。2000年はカナダのアルバータでカナダ人との合同チームで登山をした。天候に恵まれず登頂できなかったが、彼にとっては日本人以外との初めての登山となった。

01年のナンガパルバットにて、のちに多くの頂きをともしするドイツ人登山家であり国際山岳ガイドのラルフ・ドゥイモビッツと出会う。以来、ラルフと彼のパートナーであるオーストリア人女性登山家のガリンダ・カールセンブラウナー、および彼らの仲間たちとの登山が続く。

竹内：

ナンガパルバットの公募隊に応募したのは、日本人の友人に誘われたからです。それがなかったら行かなかったかもしれません。けれど直前になって友人が参加できなくなり、結局、日本人は私ひとりになりました。それまでの登山は、連れて行ってもらう登山でした。私が参加する前から計画があり、私はそこに乗っかっていきました。けれど、ナンガパルバットあたりから少しずつ変わってきます。ナンガパルバットは公募隊でしたが、そこにはリーダーはいませんでした。ラルフはリーダーというよりも

オーガナイザー。メンバーたちはイーブンな関係にあります。行動中も自分で自分の面倒をみますし、ルートなどの判断については互いに意見を出し合います。それらを最終的に調整するのがラルフです。

最初は、私もラルフの運営する公募隊に参加する形でしたが、次第にラルフやガリンダと私の関係も変容してきました。ひとつの山を終えたあとのバックキャラバンのときや、カトマンズに戻ってきてから、「次はどこの山に登ろうか？」と相談が始まるようになったのです。

このように、私がここまでヒマラヤ登山を続けてこられたのは、人に恵まれたことがとても大きいと思います。またなによりも、私自身がヒマラヤ登山が好きだったということが、根幹にあります。好きだという気持ちには限りがありません。そしてさらなる要素としては、ヒマラヤ登山にかかる費用がそれほど高くないとわかったからです。

酸素ボンベを使用しませんし、シェルパレスですから、マカルーのときのような莫大な荷物は不要。そうなれば輸送費もかからないし、荷物を運ぶポーターにかかる費用も圧縮できます。

ヘリでベースキャンプ入りするのは一見高そうに見えるかもしれませんが、ポーターを雇って日数かけていくことを考えると決して高くありません。高所順応が必要な場合は歩いてベース入りします。それが効率よくなければほかのエリアで順応して、ベースへはヘリで入ります。次の8000m峰へ継続する場合には、帰路にヘリを使うこともありました。バックキャラバンは日数がかかるため疲労がたまったり、再度高所順応する必要が出てきたりするからです。このように考えていくと、ヘリは単に高いだけではありません。場合によっては安上りですし、時間や手間をお金で買って効率よくアプローチする方法です。

パーミッションは、ほかのチームから切り売りしてもらおう方法もあります。そうやっていくうちに、費用が圧縮できます。チープになるという意味ではなく、リーズナブルな価格になります。

リーズナブルな登山を知れば、春に登って秋にも登ろうとか、繰り返し行くことができるようになってきます。「一生に一度ヒマラヤに登りました」というのではもったいないですよ。今の時代には、継続できる環境があるのです。

登山のスタイルについて、極地法は過去の遺物であり、アルパインスタイルこそ優秀であると思われがちですが、私はそうは考えません。それぞれの山、そのときのメンバーに合ったスタイルがあると、考えています。マカルー東稜は、極地法でなければ登れなかった山です。その後のアンナプルナ北面、シシャパンマ南東壁などは、アルパインスタイルが合理的だったわけです。

私はいろいろな時代を経験することができました。日本の組織登山が優勢だった時代には、大規模なチームで登りました。その後、公募隊にも参加したし、そこで知り合った外国人たちをパートナーにしてみました。二度目のガッシャブルムⅡ峰以降は、自分でチームを作りメンバーを集めています。

いろいろな時代を経て、様々な形の登山ができたこと、それぞれの強みも弱みも経験できたことが、わたしにとってはとてもよかったですし、恵まれていると思っています。

約20年のあいだに、私たちの登山を取り巻く環境は大きく変化しました。装備や技術など登山そのものも変化しましたが、社会情勢の変化も大きいです。たとえば通信方法も変化しましたね。マカルー東稜のころは、衛星電話が35kgもあって、発電機で動かさなければなりませんでした。同行していた新聞記者は、フィルムで撮った写真を、ダークボックスを

使って自分で現像し、伝送機で日本に送っていました。いまはだれもがデジカメで容易に撮れますよね。メモリーカードをパソコンに入れれば、そのまま通信ができます。衛星電話だってとても小さくて軽いです。私がひとりで山頂にもっていくぐらいですから。

これも、ヒマラヤ登山を続けてきたからこそ、経験できたことだと思います。いろんな時代を経験でき、本当に幸せです。

2006年プロ宣言

2006年3月、竹内はプロの登山家として活動すると宣言した。都内で開かれたこの記者会見に集まったのは、新聞各社、山岳雑誌編集部、フリーランスライターなど。報道を読み、「プロの登山家が誕生したのか」「プロの登山家というのが、日本にはいるのか」と知った、一般社会の人たちは少なからずいただろうが、一方で登山家が“プロ宣言”をするのは、初めてのことであり、なぜわざわざ“プロ宣言”をしなければならなかったのか、その意味はなんであるのか。当時は、周囲の理解が及ばない点があったろう。

竹内：

プロ宣言というのは、覚悟を示すということだと思います。私は、登山の世界でやっていくのだという決意を、社会に示したわけです。自称〇〇家というのはよくありますが、それはいい加減だと思います。自称ですから、都合が悪くなったら辞めたっていいことなんです。それとは違う、ということをやっているのです。

それにはまず、8000m峰14座を登ると、記者会見で話しました。その時点で残っていたのは、カンチェンジュンガ、マナスル、ガッシャブルムⅡ峰、ブロー

3. 海外登山記録

ドピーク、ローツェ、チョ・オユー、ダウラギリの7座、ちょうど半分になります。

これらについても、「いつか登ります」では話になりませんので、5～6年のうちにという期間的な目標も立てました。

14座というのは、日本人にとっては負の遺産のようなものでした。日本の登山界では、これが成し遂げられていないということに、私は悔しさすら感じていました。

14座を登り切ってみせますという覚悟、登山の世界で生きていきますという覚悟を示しました。私のこの覚悟を、スポンサーなど周囲の人たちも受け止めてくれたと思っています。

さらに言うと、私がプロの登山家として存在するならば、私を取り巻くプロがほかにも存在する、存在する可能性が広がると思います。たとえば写真家、ジャーナリスト、編集者、あるいは山岳気象予報士など。登山の業界が成長していくことにもつながると考えています。

プロがいない限り登山はスポーツにはなりません。登山をいかにスポーツとして成立させられるか、これがいま我われに課せられた課題だと思います。

ガッシャブルムⅡ峰の雪崩

プロ宣言したその年の春、竹内はカンチェンジュンガへ向かった。2003年にラルフら5人の仲間とトライして以来3年ぶりのことだった。今回は、ラルフとガリンダ、竹内の3人で臨み、登頂。翌年はマナスルと順調に頂きを踏んできた。

さらにその翌年の08年のガッシャブルムⅡ峰は国際公募隊に属し、ノーマルルートから登っていた。C2上部で大規模な雪崩事故にあったのは、このときだ。竹内を含む3人が巻き込まれ、残りの2人は帰らぬ人となった。のちの診断で竹内は、肋骨5本と

腰椎3番の破損骨折を負っていた。C2からBCへ、それからスカルド、イスラマバード、東京へとたまたま現場に居合わせた他チームの登山者、山の仲間や医師たちなどによりまさに“命のリレー”がされ、九死に一生を得た。

実は、竹内がヒマラヤで瀕死に陥ったのは、これが2度目だった。05年のチョモランマ北陵7700m地点にて、重度の脳浮腫のため一時的に意識を失ったことがあった。ラルフ、ガリンダの献身的看病とサポートの甲斐もあって、このときもなんとか下山ができた。

そして雪崩事故のあと、竹内がガッシャブルムⅡ峰に戻ってきたのは、きっかり1年後だった。

竹内：

死んでもいないのに、自分の足で降りていないというのは、ちっとも納得がいかないんですよね。気持ちが悪かったです。自分勝手な決着のつけ方だったと思いますが、私は自分の足でもう一度ガッシャブルムⅡ峰に登り下りたかったのです。

患部の腰椎にはボルトが入ったままですし、体調も完全には回復していませんでした。いったい自分の身体がどこまでもつのか、自分でもわかりませんでした。けれど、翌年必ず現場に戻ると、私は、事故後日本に戻ったときにすでに決めていました。

現場に戻っても亡くなった人たちが帰ってくるわけではなかったし、なにも変わらなかったと思います。けれど私は、「山登りを続けよう」と改めて思いました。あのときの状況を思い返すに、どう考えても助けようのない状況だったはずです。本当に多くの方が身を挺してサポートしてくれたおかげで生還できたのであり、彼らの誰一人として欠けても、私の命はありませんでした。きっと、私は一度死んだんだと思いました。

死んだけれど、山で出会ったあの人たちに、命を少しずつ分けてもらったんだと思うんですよ。だから、彼らに「私は、山に帰ってきたよ」と伝えたかった。私が再び登れば、彼らはどこかで見ていてくれるかもしれない、そう考えました。

この命は、山で分けてもらった命なのです。ですからこの命は、山で使うものだと思います。

14座を登って

ガッシャブルムⅡ峰からブロードピークへ継続。このときから竹内は、自分の登山を積極的に映像に残すようになった。ふたつの登山を撮影したのは、平出和也だった。

09年には再び、ラルフ、ガリンダと組み、ローツェに登頂した。これにより、ラルフは14座をコンプリート。10年、11年は、チョ・オユーへ。初年のパートナーは公募した。そして12年がダウラギリだった。チョ・オユー以来、クライミングパートナーであり、スチールとビデオカメラでの撮影を担当しているのは、中島健郎だ。

ダウラギリ下山後、カトマンズではネパール山岳協会主催の記者会見とパーティが開催された。日本大使館では在ネパール日本人会主催により、作家の塩野米松との対談というスタイルの報告会があった。

帰国後は、新聞、幅広い分野の雑誌（山岳雑誌、スポーツ雑誌、文芸誌、週刊誌など）、テレビ、ラジオ、講演会などに多数登場している。

登山社会だけでなく、一般社会がこれほど登山に注目したのは、久しぶりのことだ。とくに印象的だったのは2点。ひとつは、登頂後、報知新聞の号外が街頭で配られ、新聞各社が1面に竹内の登頂を伝えたことだ。読売新聞社が後援している登山が他社の新聞の一面に載ることは、珍しい。もうひとつは、この原稿を書いているいまになっても（12年12月末）、

メディアからのインタビューや講演会が続いていることだ。

竹内：

14座登頂というのは、駅伝のようなものだったかもしれません。たまたま最終ランナーが私でした。今回私が14座を登ったことによって、かつて14座の志半ばで亡くなった方ター山田昇さん、田辺治さん、名塚秀二さんらの名前が再び注目され、彼らの登山が評価されるのであれば嬉しいです。彼らは命をかけて登り続けていたわけです。命をかけるという行為は、崇高なものです。そういうことが忘れ去れてしまうとしたら、私たちのように少なからず彼らの登山を知っている者にとっては、耐え難いことですよ。

私個人にとっては14座というのは過去のものになりました。メディアが私だけを取り上げているようでは、駄目です。「登山」「登山家」「ヒマラヤ」「14座」、そういったキーワードが私から離れて、歩いていってこれなければなりません。

「子どもが夏休みの自由研究で、竹内さんの登山を取り上げました。」という手紙をもらいました。山手線の駅名を覚えるように、子どもたちが14座の名前を覚えて遊んでいる、という話を聞いたこともあります。こういう話はうれしいですね。

私は子どものころ読んだダウラギリ初登頂の話が忘れられなくて、今回の登山のあと、スイス・オーストリア隊がBCへの物資輸送のために使用した飛行機・イエティ号の墜落現場に寄ってきました。鮮やかなピンクとイエローにペイントされたイエティ号の残骸が、いまだ残っていたんですよ。このように、子どものころに見聞きしたものの印象というのは、大人になっても残りますよね。だから今の子どもたちの心のなかにも、登山という言葉だけでも残って

3. 海外登山記録

いってもらいたい、いつかにかの可能性を生み出すのではないかと考えています。

ヒマラヤという山脈については、みなが学校の授業で習います。けれど、それは単なるカタカナ4文字でしかないんです。しかし、世の中でヒマラヤ登山について伝えると、それを受け取った人にとっては、「ヒマラヤ」という単語は、にわかに生き生きとしたものになります。地球にあれだけダイナミックな地殻変動が起こり、成層圏に届きそうなくらいまで隆起したヒマラヤという山脈がある。そしてその大きな山脈を舞台に、登山家たちは山を登り続けている。そういうストーリーを伝えていくのが、私の役目だと思っています。

私自身が有名になる必要はありませんが、登山、ヒマラヤについてもっと認知されるよう、私はこれからも努めていくつもりですし、このことについて

は具体的な計画もあります。

ヒマラヤ登山は限られた人のものではありません。もっと多くの人に知ってもらいたいし、登ってもらいたい。日本の山に行くのと準備も手間も大して変わりません。一度やってみるとわかってもらえると思います。日本の山だって楽しければまた行きますよね。同じようにヒマラヤに登りたければ、行けばいいし、楽しかったならば、また登ればいいのです。登山研修所にやってくる学生たちに向けてとしたら、やっぱりそれは、「ヒマラヤに登りたい」という気持ちがないとヒマラヤ登山は始まらない、それが大切だということです。その気持ちが湧き上がってくるような、インスピレーションを私から渡したいです。

年 月	山 (ルート)	標高と標高順位 (O印)	結果	隊名/主なメンバー
1991年9～10月	シシャパンマ (北面)		7500m地点まで	立正大学山岳会
1995年5月22日	マカルー (東稜)	8463m ⑤	登頂、東稜下部初登攀	日本山岳会
1996年5月17日	チョモランマ (北陵)	8848m ①	登頂	立正大学山岳会
1996年8月14日	K2 (南南東リブ)	8611m ②	登頂	日本山岳会青年部
2001年6月30日	ナンガバルバット (キンスフオッフアールルート)	8125m ⑨	登頂、以下無酸素	公募隊、ラルフ
2003年4～5月	カンチェンジュンガ (北面)		7500m地点まで	竹内、ラルフ、ガリンダ、ベイカーら5名
2004年4～5月	シシャパンマ (南西壁)		6500m地点まで	竹内、ラルフ、ガリンダ
2004年5月28日	アンナブルナ I 峰 (北面)	8091m ⑩	登頂	竹内、ラルフ、ガリンダ
2004年7月25日	ガッシャブルム I 峰 (ノーマルルート)	8068m ⑪	登頂	竹内、ラルフ、ガリンダ
2004年7月下旬	ガッシャブルム II 峰		悪天のため中止	竹内、ガリンダ
2005年5月7日	シシャパンマ (南西壁～北面)	8027m ⑭	登頂	竹内、ラルフ、ガリンダ
2005年5月上旬	チョモランマ (中央ロンブク氷河側より北陵)		7700m地点まで	竹内、ラルフ、ガリンダ
2006年5月14日	カンチェンジュンガ (南面)	8586m ③	登頂	竹内、ラルフ、ガリンダ
2007年5月19日	マナスル北東面 (ノーマルルート)	8163m ⑧	登頂	公募隊、ラルフ
2007年5月～6月	ガッシャブルム II 峰 (ノーマルルート)		7000m地点まで	公募隊
2008年7月8日	ガッシャブルム II 峰 (ノーマルルート)	8035m ⑬	登頂	竹内、ベイカー、平出
2008年7月31日	ブロードピーク (ノーマルルート)	8051m ⑫	登頂	竹内、ベイカー、平出
2009年5月20日	ローツェ (ノーマルルート)	8516m ④	登頂	竹内、ラルフ、ガリンダ
2010年9月1日	チョ・オユー (ノーマルルート)		7700m地点まで	竹内、中島、阿蘇
2011年9月30日	チョ・オユー (ノーマルルート)	8201m ⑥	登頂	竹内、中島
2012年5月26日	ダウラギリ (ノーマルルート)	8167m ⑦	登頂	竹内、中島 (C2上部まで)